【 71 】

| | |
|---|---|
| 氏名 | **田 村 精 平** |
| 学位の種類 | 医 学 博 士 |
| 学位授与番号 | 乙 第 1589 号 |
| 学位授与の日付 | 昭和60年9月30日 |
| 学位授与の要件 | 博士の学位論文提出者（学位規則第5条第2項該当） |
| 学位論文題目 | **総胆管結紮とその閉塞解除後の肝の微細構造の変化に関する実験的研究** |
| 論文審査委員 | 教授 長島秀夫　教授 寺本 滋　教授 赤木忠厚 |

## 学位論文内容の要旨

実験的に肝外閉塞性黄疸犬を作成し，黄疸持続期間（2，3，4，5，6週）の違いによる肝臓障害像の経時的な変化と，黄疸解除後4週目における肝臓障害の回復の程度を，主として光顕及び透過電顕により形態学的に検討を行なった。

胆道閉塞後の肝障害は，2週でグリコーゲン顆粒の減少，滑面小胞体の増生，毛細胆管の拡張がみられ，3週になると肝細胞の変性，壊死，グリソン鞘の線維化，細胆管の増生がみられるようになり，更に，閉塞期間の延長とともに，これらの変化は増強した。閉塞解除後の肝の回復像をみると，閉塞2，3週群では，閉塞解除後4週を経過すると肝組織はほぼ正常に復したが，閉塞4，5，6週群では閉塞解除後4週を経ても，線維化を伴なう細胆管の増生や炎症性細胞浸潤がかなり残存し，グリコーゲン顆粒の回復が弱く，ライソゾームや滑面小胞体がかなり残り，毛細胆管の拡張も強く，正常とはかなり隔たりがあった。

以上より，閉塞性黄疸の持続期間の違いによる肝障害像と黄疸解除後の回復像との関係から，閉塞解除手術の時期は，黄疸発現後3週以内が望ましいと考えられた。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は閉塞性黄疸の持続期間の違いによる肝障害像と黄疸解除後の回復像との関係を実験的に研究したもので，閉塞解除手術の時期について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。